

時代の流れと相鉄沿線映画館事情

10月発表 横浜歴史研究会 西沢 昭

1. はじめに

歴史にはイフはないということがよく言われる。もしあの時戦争をしなかったら、というあのイフだ。歴史は当時の常識で流れているので、当時の常識で理解することが大切であり、なかなか難しいことだ。会社人生活を過ごしていると、世の中の大きな流れに巻き込まれてしまい、判断を間違えることがあるが、その時流れに巻き込まれず正しい判断ができたであろうかを顧みて、歴史研究の一助にできないかと思いでまとめた。

今回は昭和の高度成長下で、映像娯楽が映画からテレビに大きく変わった時の世の中のようにすを顧みる。「当時の常識により、その時の世間が動いている」ということをまとめた。

2. テーマ選定の理由

私は相鉄沿線に住んでいる。就職により地方から出てきたので、昔の横浜は知らない。地域に長く住むことで、その地域がどのような歴史をたどっていたのかに興味が出てくる。会社生活の人生と、私の地域が歴史の流れの中にあったことを、今回のテーマである「映画館事情」としてまとめた。映画館は戦前から娯楽の王様としての地位を築いていた。それがあつた時、テレビの放映開始と皇太子殿下の結婚を境にし、テレビにその地位を奪われてしまった。娯楽の王様の選手交代である。この選手交代は最近ではアナログからデジタルや、環境保全技術、コスパなどという価値観の変化で同じように起きている。その当時の常識変化を振り返ることで、歴史観の再認識ができるのではないと思う。

3. 戦前の相鉄沿線

大正時代の初め、世の中は鉄道敷設ブームで横浜市近郊でも横浜線や東海道線、横須賀線を軸に相鉄線（当時は神中鉄道）、京急線（当時は湘南電気鉄道）、東横線（当時は東京横浜電気鉄道）、相模鉄道線などができ、人々の移動が容易となった。それに伴い、工場も進出をし、鉄道駅周辺には歓楽街もでき、映画館も建設されるようになった。昭和初期、相鉄線沿線の近代的地区は星川周辺の工場群とそれを囲む歓楽街で、当時の天王町駅と保土ヶ谷駅周辺には永楽館や保土ヶ谷座の映画館が開館した。

4. 戦後の相鉄線沿線

太平洋戦争で、すべてを焼かれ、進駐軍に接収された中でも、人々は日々の生活の中で、娯楽を求め、昭和21年には早くも「保土ヶ谷文化劇場」が名称を変え開館、昭和25年には「永楽館」も再開した。相鉄沿線では、戦中・戦後と二俣川方面から農産物を運び、横浜中心街への食糧供給を行っていた。しかし、横浜駅周辺では、横浜駅西口が進駐軍の接収に会い、昭和28年まで開発が行われることはなかった。したがって、そのころまでは天王町周辺が相鉄線の繁華街であった。

一方相鉄線大和駅周辺は、昭和16年の海軍「空廠C」計画で、大和駅周辺は昭和36年を完成年とした軍事都市が建設されつつあった。そして戦後はこれが大きな住宅街に変貌をした。

戦後しばらく相鉄線沿線は大和駅と天王町・星川駅周辺が都市化されている状態で、それ以外は農地が広がっている田園地帯であった。このような戦後の状態で、一方では戦地からの引揚者の増加、一方では米軍指導による農地改革で、戦前の田園地帯は大きく変わろうとしていた。

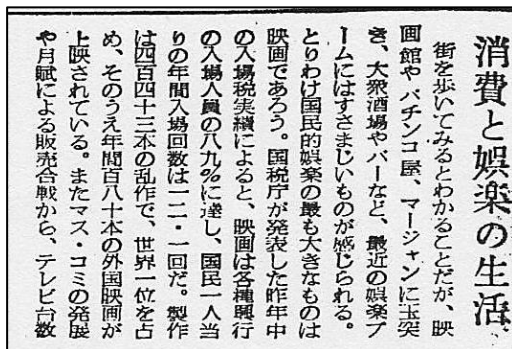
昭和24年の物資統制令撤廃を境として、相鉄線沿線の住宅開発が活発になってきた。主な地域は鶴ヶ峰から瀬谷駅にかけてである。昭和23年二ツ橋、昭和24年上星川、昭和26年三ツ境などに公営住宅が建設され、昭和24年には希望ヶ丘に民間の宅地分譲が始まると、にわかに沿線の住宅地化が進んだ。この住宅地化により、人口増加を想定した横須賀地域の実業家は三ツ境駅近くに昭和29年「三ツ境すばる座」という映画館を進出させた。彼らは横須賀三浦地区に映画館を所有していて、右肩上がりで増加する映画館利用者数を見て、今後に期待し、新しい地域での市場開拓に乗り出したものと思われる。当日は、彼らの足跡を参考にして時代の先取りをした経営を見てみようと思う。

5. 戦後の映画館市場

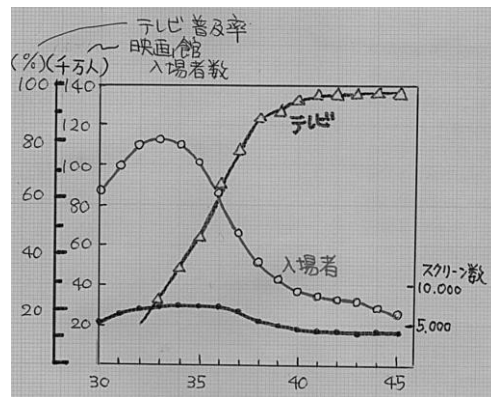
ア. 昭和20年代の映画館事情

保土ヶ谷区の例からもわかるとおり、戦後の昭和25年ごろからは、市民の娯楽要望は高まり、映画館も次々と建設されるようになってきた。今回は、映画館の歴史について映画年鑑を用いて調査研究をした。まず昭和28年における相鉄沿線の映画館は、天王町・保土ヶ谷地区として西区西前町の藤棚中央映画館、藤棚町の浜富士館、そして保土ヶ谷区保土ヶ谷町の保土ヶ谷文化劇場、天王町の永楽館と合計4館が存在した。大和市駅周辺にあっては、大和日活の1館であった。それがわずか2年後、昭和30年になると、西区浅間町にライオン座が開館し、天王町・保土ヶ谷地区は5館となった。大和市ではつばめ座、大和大映、鶴間名画座が開館し4館に増えた。全国での映画館来場者数も年間10億人に迫る右肩上がりであった。年間10億人というのは、国民が年10回以上映画を見るような状態である。当時の新聞記事にも、映画娯楽の繁栄をうたった記事を見ることができる。

しかし、一方では昭和28年にテレビ放送が本格化し、チャンネル数も徐々に増え、映画の次の世代をうかがうようになってきていた。20年代終わりにになると、映画製作会社もその力を認識するように警戒色を表すようになってきた。そして、昭和30年下半年からは映画製作の激動期に突入することとなった。映画年鑑1957年版には、その頃のことを「テレビ普及の予想以上の速さに対し、政府は映画産業の重要性を認識している」ことが記されている。



昭和33年12月17日神奈川新聞記事



筆者作成グラフ

イ. 昭和30年代の映画館事情

先ほどの映画年鑑からもわかるとおり、昭和30年代は映画の激動期であり、数々の支援策を行うも、テレビの普及には勝てず、徐々に市場は縮小をしていく。業界での必死の立て直し策を見ながら、時代の変化をどのようにして乗り越えようとしていたかを見てみたい。

つまり、当時の各種統計を見ると、映画産業の衰退はテレビの普及とかみ合っていて、最終的にテレビの勝利となっているわけであるが、それは過去から見た時の話であって、業界の中では、生き残り、最悪でも住み分けを模索する動きを感じ取ることができる。業界、消費者ともども、住み分けという被害の少ない方法を期待するわけであるが、実際は弱肉強食の世界であるので、厳しい結果が待っていることとなる。変化の進行している当時は未来の実績はないわけであるから、現在までの状況変化で、どのように未来を変えることができるのかに必死になるわけであって、未来がわかっている、その未来にどのように現在をつなげていけるのか確実なことが見えないわけであるので、一つ一つの現象を見て、簡単に批判ができなくなっていくことが実感されると思う。

まず昭和33年の新聞記事を見ると、映画業界の右肩上がりを評価し、このまま映画娯楽大国になってしまうのではないかとといううれしい予測を挙げている（上記新聞記事）。当時の映画館来場者数と映画館スクリーン数、テレビ普及率をグラフ化してみると、新聞記事のころが映画産業のピークであることが分かる。

次に翌年の昭和34年には入場者数が減り始めている。歴史から見ると衰退の始まりであるが、その時代の人から見ると、一時的な落ち込みとしか見えないであろう。経営努力で持ち直すとするのが一般的である。しかし、川上の映画製作会社では、現象を真剣に受け止め、テレビ産業との二股掛けを実行し始めている。映画俳優のテレビ出演禁止やテレビ会社への出資などである。もちろんこのようなことは企業秘密であるから、一般の映画館では知る由もないことであろう。

昭和36年になると、入場者数の減少が続くこと、テレビの普及台数が1千万台を超えたことから、映画産業の危機感が一般市民にも広がることとなり、映画館の閉館が相次いでくる。映画館の経営者も未来を描くのには必死である。映画館を閉館してどうするのか、長く続けても赤字が増えるし、設備の転用を考えてもよい方法がない。このような状況で、少し資金のある経営者は弱った映画館を買収することとなり、一人の経営者が数館の映画館を保有することとなる。それは問題の先送りに過ぎないが、新聞などでは、映画館不況も今が底などの記事が出るとそれに頼ることも出てしまう。このようにして昭和37年には、生き残り可能な映画館と閉館やむなし映画館とで、道筋が分かれてしまった。

一方の映画会社では、テレビ映画という新しい分野を開発し、制作映画をテレビに使用することでの生き残りが主となっていった。四半世紀経過すると、映画会社は映画を映画ソフトとして有効販売する方法を考案した。新作映画は、まずは劇場で上映をし、しばらくのちに航空機内で上映し利益を上げる。その後テレビ放映やビデオテープ・DVDなどのパッケージソフトで、画像販売をする。時間経過とともに、段階を追って販売し利益を出す方式を考案していった。そして、その後訪れたデジタル化の波を上手に利用し、デジタル映画配信で新しい映画館を運営するようになり、現在のようなデジタル配信映画館方式に変化をし、昭和のフィルム配信による映画館経営はごく少数姿となってしまった。

6. さいごに

戦後の住宅開発で、映画館事業を行った三ツ境の映画館は、テレビ放映という新しい波にのまれ、一時新経営者になり存続を狙ったが、映画産業の大きな波には逆らえなかった。昭和29年開館、昭和36年閉館という非常に短い営業期間であった。相鉄線沿線の大和駅や天王町駅周辺の映画館も、昭和の終わり平成の初めの1990年頃、バブル崩壊前後とともに姿を見なくなってしまった。しかし映画製作本数は、昔も今も年間500本弱で推移のようである。

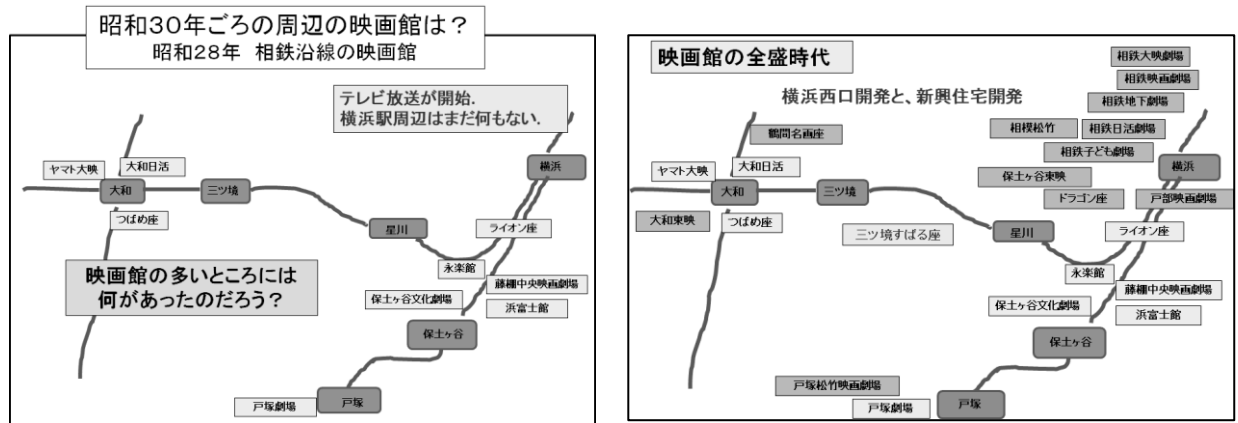
世の中の大きな波により、今までの産業が消え新しい産業に置き換わっていく時の庶民の姿を、歴史認識として正しく理解することを現代史から学び、古代・中世・近世・近代史に応用していきたいと思う次第である。

付録

1. 相鉄沿線の映画館経営者と支配人の移り変わり（個人名は仮名とした。出典は映画便覧）

		相鉄沿線の映画館支配人変化																		
映画館名		55年(S30)	56年(S31)	57年(S32)	58年(S33)	59年(S34)	60年(S35)	61年(S36)	62年(S37)	63年(S38)	65年(S40)	67年(S42)	73年(S48)	74年(S49)	80年(S55)	85年		90年		
相鉄劇場A	経営者	×	×		相鉄不動産	相鉄不動産	相鉄不動産	相鉄不動産	相鉄不動産	相鉄不動産	相鉄不動産	相鉄興行	相鉄興業	相鉄興業	相鉄興業	相鉄ローゼン	相鉄ローゼン			
南幸町	支配人	×	×		栗原一郎	栗原一郎	宮坂次郎	宮坂次郎	宮坂次郎	宮坂次郎	宮坂次郎	入江健司	野島正一	野島正一	大矢健吾	山崎 正	山崎 正			
相鉄劇場B	経営者	×	×	×	相鉄不動産	相鉄不動産	相鉄不動産	相鉄不動産	相鉄不動産	相鉄不動産	相鉄不動産	相鉄興行	相鉄興業	相鉄興業	相鉄興業	相鉄ローゼン	相鉄ローゼン			
南幸町	支配人	×	×	×	栗原一郎	栗原一郎	宮坂次郎	宮坂次郎	宮坂次郎	宮坂次郎	宮坂次郎	田中浩二	宮内和男	大矢健吾	野地昭雄	千葉真一	千葉真一			
相鉄劇場C	経営者	×	×	×	相鉄不動産	相鉄不動産	相鉄不動産	相鉄不動産	相鉄不動産	相鉄不動産	相鉄不動産	相鉄興行	相鉄興業	相鉄興業	相鉄興業	相鉄ローゼン	相鉄ローゼン			
南幸町	支配人	×	×	×	栗原一郎	宮坂次郎	宮坂次郎	宮坂次郎	宮坂次郎	上野一馬	中野啓介	中野啓介	宮内和男	大矢健吾	石渡雄太	千葉真一	千葉真一			
相鉄劇場D	経営者	×	×	×	×	×	×	相鉄不動産	相鉄不動産	相鉄不動産	相鉄不動産	相鉄興行	相鉄興業	相鉄興業	相鉄興業	相鉄ローゼン	相鉄ローゼン			
南幸町	支配人	×	×	×	×	×	×	宮坂次郎	宮坂次郎	宮坂次郎	宮坂次郎	上野一馬	中島雄二	宮内和男	大矢健吾	野地昭雄	千葉真一			
相鉄劇場E	経営者	×	×	×	×	×	×	×	×	相鉄不動産	相鉄不動産	相鉄興行	相鉄興業	相鉄興業	相鉄興業	相鉄ローゼン	相鉄ローゼン			
南幸町	支配人	×	×	×	×	×	×	×	×	上野一馬	田中富雄	田中富雄	野島一郎	野島一郎	千葉真一	山崎 正	山崎 正			
相模松竹	経営者	×	×	×	相模興行	相模興行	相模興行	相模興行	相模興行	相模興行	東日本松竹興行	東日本松竹興行	×	×	×	×	×			
南幸町	支配人	×	×	×	栗田太郎	栗田太郎	栗田太郎	清水昭二	辻 茂雄	辻 茂雄	辻 茂雄	辻 茂雄	辻 茂雄	辻 茂雄	辻 茂雄	辻 茂雄	辻 茂雄			
横浜西口名画座	経営者	×	×	×	×	×	×	×	福寿浩一	福寿浩一	福寿浩一	福寿浩一	中央興業	中央興業	中央興業	中央興業	中央興業			
南幸町	支配人	×	×	×	×	×	×	×	難波和人	難波和人	難波和人	難波和人	難波和人	難波和人	難波和人	難波和人	難波和人			
原簿映画劇場	経営者	福寿浩一	中央興行	福寿浩一	福寿浩一	中央興行	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×			
西前町	支配人	福寿浩一	福寿浩一	福寿浩一	矢島勝利	福寿浩一	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×			
浜富士館	経営者	大石興業	大石商事	大石商事	大石商事	大石商事	大石商事	大石商事	大石商事	大石商事	大石商事	×	×	×	×	×	×			
原簿町	支配人	山井真一	山井真一	山井真一	大石金雄	大石金雄	大石金雄	大石金雄	山田一登	山田一登	山田一登	×	×	×	×	×	×			
ライオン座	経営者	北原美恵	北原美恵	北原美恵	北原美恵	北原美恵	北原興行	北原美恵	北原美恵	北原美恵	北原美恵	北原興行	北原興行	北原興行	北原興行	北原興行	北原興行			
浅間町	支配人	村山義雄	村山義雄	村山義雄	村山義雄	村山義雄	村山義雄	村山義雄	村山義雄	村山義雄	村山義雄	村山義雄	村山義雄	村山義雄	村山義雄	村山義雄	村山義雄			
保土ヶ谷文化	経営者	保土ヶ谷文	保土ヶ谷文	中村茂子	中村興行	保土ヶ谷文	中村茂子	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×			
保土ヶ谷町	支配人	山瀬弘一	山瀬弘一	山瀬弘一	山瀬弘一	中村茂子	中村茂子	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×			
ドラゴン館	経営者	×	×	×	中村茂子	中村興行	保土ヶ谷文	中村茂子	中村茂子	中村茂子	中村茂子	中村興行	中村興行	中村興行	×	×	×			
熊子町2	支配人	×	×	×	山瀬弘一	山瀬弘一	山瀬弘一	中村茂子	柳川和男	柳川和男	柳川和男	柳川和男	柳川和男	柳川和男	柳川和男	柳川和男	柳川和男			
永楽館（保土ヶ	経営者	中本太郎	中本太郎	中本興行	中本興行	中本興行	中本興行	中本興行	中本興行	中本興行	中本興行	中本興行	中本興行	中本興行	中本興行	中本興行	中本興行			
天王町2	支配人	中本太郎	中本太郎	小山信雄	小山信雄	小山信雄	小山信雄	小山信雄	小山信雄	小山信雄	中本次郎	中本次郎	中本次郎	中本次郎	中本次郎	中本次郎	中本次郎			
保土ヶ谷東映	経営者	×	×	中本興行	中本興行	中本興行	中本興行	中本興行	中本興行	×	×	×	×	×	×	×	×			
天王町1	支配人	×	×	中本次郎	中本次郎	中本次郎	中本次郎	中本次郎	中本次郎	×	×	×	×	×	×	×	×			
大和日活	経営者	町田日活	今岡五郎	今岡興業	今岡興業	今岡興行	今岡興行	今岡興行	今岡興行	中山武夫	中山武夫	中山武夫	中山武夫	中山武夫	中山武夫	中山武夫	中山武夫			
深見	支配人	田山重造	小野和男	小野和男	小野和男	小野和男	小野和男	小野和男	小野和男	中山武夫	中山武夫	中山武夫	中山武夫	中山武夫	中山武夫	中山武夫	中山武夫			
つばめ座	経営者	山田武司	山田武司	山田武司	山田武司	山田武司	山田武司	山田武司	山田武司	山田武司	山田武司	山田武司	山田武司	山田武司	山田武司	山田武司	山田武司			
深見	支配人	山田武司	山田武司	山田武司	山田武司	山田武司	山田武司	山田武司	山田武司	山田武司	山田武司	山田武司	山田武司	山田武司	山田武司	山田武司	山田武司			
大和大映	経営者	安田健男	安田健男	安田健男	安田健男	安田健男	安田健男	安田健男	安田健男	安田健男	×	×	×	×	×	×	×			
下草柳	支配人	安田健男	安田健男	安田健男	安田健男	安田健男	安田健男	安田健男	安田健男	安田健男	×	×	×	×	×	×	×			
鶴岡名画座	経営者	×	中山武夫	中山武夫	中山武夫	中山武夫	中山武夫	中山武夫	中山武夫	中山武夫	中山武夫	中山武夫	中山武夫	中山武夫	中山武夫	中山武夫	中山武夫			
西鶴岡	支配人	×	中山武夫	中山武夫	中山武夫	中山武夫	中山武夫	中山武夫	中山武夫	中山武夫	中山武夫	中山武夫	中山武夫	中山武夫	中山武夫	中山武夫	中山武夫			
大和東映	経営者	×	×	×	×	中山武夫	中山武夫	中山武夫	中山武夫	中山武夫	中山武夫	中山武夫	中山武夫	中山武夫	中山武夫	中山武夫	中山武夫			
深見	支配人	×	×	×	×	中山武夫	中山武夫	中山武夫	中山武夫	中山武夫	中山武夫	中山武夫	中山武夫	中山武夫	中山武夫	中山武夫	中山武夫			
すばる座	経営者	×	×	川崎武三	川崎武三	すばる興行	すばる興行	中山武夫	福山松信	×	×	×	×	×	×	×	×			
阿久和町	支配人	×	×	山岡太郎	山岡太郎	山岡太郎	山岡太郎	川崎武三	中山武夫	中尾節一	×	×	×	×	×	×	×			
										×印は存在が未確認			個人名はすべて仮名としてある			出典：映画年鑑別冊映画便覧				

2. 昭和時代の相鉄沿線の映画館分布図



昭和28年と昭和36年の相鉄線沿線の映画館分布（筆者作成図）

参考文献

- 映画年鑑 1955年から2000年
- 保土ヶ谷区史 平成9年
- 横浜市史Ⅱ
- 神奈川新聞 1955年から1963年
- 桜陵時報（希望が丘高校新聞）昭和34年11月7日号
- われらの郷土 保土ヶ谷戸塚新報社 昭和34年

以上